

「ロースクールへ行こう!!2016」感想文 @北海道会場

・はじめに

この感想文では、個別具体的なことではなく、今回の説明会（以下、「本説明会」）の制度的な面から話をしたいと思う。というのも、「〇〇先生の話に感動した」というようなことを書いても今後の参考にはあまりならないと考えるからである。むしろ、制度的な面から話をすることで、次年度以降他の会場にも応用の利く長所短所がはっきりとし、また具体的な部分も透けて見えてくるであろう。

・第1部について

第1部は法曹三者による対談であったが、それを仕切る司会も法曹という大変充実したものであった。法曹といってもその人数には大きな差があり、特に弁護士は多いので比較的会いやすく話も聞きやすいが、裁判官や検察官はそうではない。ましてや、いわゆる「ヤメ検」というのはかなり貴重だと考えられる。この点、本説明会の人選は非常によく、司会の弁護士は北大法科大学院卒、講師の弁護士はヤメ検という形で、ストレートな弁護士と特殊な経験を積んだ弁護士の両方を揃えたのは、話の幅が広がって非常に良かった。裁判官・検察官についても、想定される通常の訴訟以外の経験談が豊富な方を選んだのは非常に良い。話の内容としては、年収や転勤などかなり大胆に実情を披露してくださり、貴重なお話を聞くことができた。

・第2部について

第2部は法科大学院の模擬授業と、大学院生・修了生による対談とで構成された。

前者に関しては非常に評価が難しいところである。2つの科目が公開されたが、双方に共通することとして、難易度と時間が問題である。体感としてはあまり難しいとは思えず、学部2年生でも十分ついていける程度と感じたので、もう少し程度を上げてもしよれない。時間面はかなり問題で、30分でやらなければならないとなると、講師の側もかなり省略せざるを得なかったところが多いのではないかと感じる。不完全燃焼といった感がある。

各科目で見ると、「民事実務演習」では綿密な準備があったと見え、テンポもよく盛り上がりもあったが、悪く言えばあまり臨場感がなかった。「刑事法事例問題研究」では逆にその場で出席者を巻き込む以上、出席者の質に左右されるのであり、学部の授業より低調に感じた。後述するが、ある程度「サクラ」を入れておくことも必要かもしれない。

後者の対談については、良くも悪くも赤裸々で、北大法科大学院の様子がよくわかり、行こうという人も、他のところにしようという人も、両方ありうる内容であった。そのような詳しい事情を理解した上で進学するのは大事なことで、非常にありがたい。この対談の司会も、第1部の司会と同じく、北大法科大学院卒の弁護士の方が担当し、先輩・卒業生（かつ司法試験合格者）・院生という3者がそれぞれの状況から法科大学院について語る

というのはよかったと思う。

・全体について

まず、配布資料の充実ぶりには非常に満足した。弁護士会などが作成したものもそうだが、何より、院生にアンケート調査を行ったものの集成や、文科省の審査結果から抜粋した、各大学院での取り組みの例を集めたプリントが非常に良かった。法科大学院側の、積極的に情報を発信していこうという意図を感じた。アンケート調査に関しては、院を卒業したあとどうなったかということについてははっきりと書かれており、実態にかなり迫ることができた。

しかし、本説明会のために用意した時間と場所については問題があると思う。まず、対談に関しては1部2部共通して質疑応答をしやすい時間の余裕があったとは言えず、もう少しゆとりを持った時間配分が求められる。また、本説明会に参加する人が多数になると考えて8番教室を会場にしたのであろうが、満席になるほどの参加者はおらず、それならば他の教室にして、後ろに授業が詰まっているような事態を避ける方が良かったであろう。次年度以降の課題かもしれない。

もし面子のようなものから次年度以降も8番を使うのであれば、おそらく「サクラ」が必要になるであろう。というのも、参加者が決して多くはなかったことの内訳として、本説明会に敢えて参加しなかった人と、本説明会を知らなかった人があるからである。友人何人かは明らかに参加することよりも図書館などで自習することを選んだようだし、また幾人かは本説明会の存在を忘れて、授業があるものと思って8番教室に来た。前者に関しては、彼らにとって本説明会への期待がかなり低かったということであるし、後者に関しては、もはや眼中にすらないということだろう。法科大学院側としては、少なくとも本説明会のメリットをもっと積極的に発信し、周知を図るべきであろう。内容として非常に満足度は高いが、それに参加する人がいないのでは意味がなかろう。